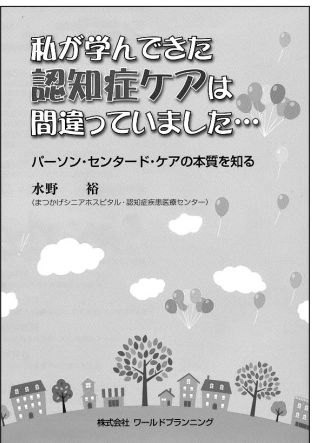


著者
インタビュー

「過去に認知症患者への対応で失敗したことの反省というか悔悟の本というか…かっこいいことは書かないと決めていました」

名古屋市のまつかげシニアホスピタル・認知症疾患医療センターのセンター長を務める著者は、2000年代初頭、パーソン・センタード・ケア（PCC）の日本への導入事業の責任者も務めた認知症の専門医。その水野医師が、認知症患者の脳を研究していた時代から、PCCに出会い認知症を学び直す過程で経験した「失敗事例」を真正面から綴った。

「私が学んできた認知症ケアは間違っていました… ～パーソン・センタード・ケアの本質を知る」



臨床現場で「心をガーンと打たれるような経験」をいくつもしたと話す。例えば、今から15年ほど前、認知症の専門外来を担当して

「中程度のになると病識はなくなる」と学んできたが、もしかすると間違っているの

認知症でなく人を見る 介護の価値観を大事に

では」。そのころから脳ではなく、その人を見るようになり、認知症患者本人の話を聴く会を立ち上げるなどの実践的活動も展開していた。

介護現場での思い込み事例の指摘もある。「利用者」に放尿、放便などの問題行動がある」と相談を持ち掛けてきたグループホームのスタッフがいました。しかし、日中はトイレ誘導すれば自分で用を足しているのです。認知症による問題行動だという思い込みが、適切なケアを提供できていないかの検証を邪魔している例は少なくありません。

BPSDや病気のせいと決めつける前に、その人に一人の人間として関わっているかを振り返ってみるべきだと促す。その上で、介護職には、医学とは異なる価値基準を大事にしてほしいとメッセージを送る。

「認知症においては医学的データよりも、あそこのデイに行ったら元気になった」という事実の方が重要。認知症の人に向き合っているケア職が、将来専門家としてその地位を認められるようになれば、と考えています」

1980円（税込）

ワールドプランニング

03-62206743(1)

水野 裕さん



いたこのこと。中等度のアルツハイマー病と診断しようとした男性が、MMSE検査の一環で「こんな病

プホームのスタッフがいま